

『問奇一覽』切韻捷法について

浦山 あゆみ

『問奇一覽』はその著者李宗孔が叙文に記しているように、『音韻須知』とセットで同時刊行された文字學の書物である。この兩書が書かれた明末清初には、『射標法』が流行していたと思われる。『射標法』とは、反切と韻圖を利用して音と文字を捜し出す方法である。當時、たいへん廣く普及した字書『字彙』に収録された韻圖に『韻法橫圖』がある。そのなかの記述によれば、反切上字から韻圖のなかの字母を求め、反切下字から同じく韻圖内の韻を求め、求め得た字母と韻から反切帰字をみつける方法が、すなわち『射標法』である。

ところで、『音韻須知』と『問奇一覽』がセットで發行されたのは、『射標法』の影響を受けたからではないかと考えられる。なぜなら、『音韻須知』は葉以震の『重訂中原音韻』（以下葉本と略稱する）を承けて成立した曲韻書であるが、葉本の直音音注をこのごとく反切に書きかえている點が大きく異なっている。そしてそれは、『音韻須知』が編纂される際に、反切と韻圖を用いる『射標法』を意識して、すべて反切に書きかえたのではないかと思われるのである。また、ペアである『問奇一覽』の切韻捷法に四聲經緯圖という韻圖が載せられている點からみても、『射標法』に對應することが、『音韻須知』が編纂された目的の一つである可能性が否めないのである。

さて、実際に『問奇一覽』切韻捷法の内容をみてみると、その

原理は「射標法」とまったく同様である。さらに興味深いことに『問奇一覽』切韻捷法の文章表現は、明末の戲曲理論家である沈寵綬が著した『度曲須知』經緯圖説の文章と極似していることが發見される。『度曲須知』の經緯圖説では陳蕙謨『皇極圖韻』を紹介しており、そのなかに四聲經緯圖という、『問奇一覽』切韻捷法所収の韻圖と同名の韻圖が載せられている。李新魁氏によれば、この『皇極圖韻』もまた『韻法橫圖』を承けて成立した書なのである（李新魁『漢語等韻學』中華書局一九八三年）。これらから、大まかな言い方を許されるならば、『韻法橫圖』↓『皇極圖韻』↓『度曲須知』↓『問奇一覽』という繼承關係が浮かび上がってくるといえよう。

しかしながら、『度曲須知』經緯圖説の四聲經緯圖と『問奇一覽』切韻捷法の四聲經緯圖とを比較してみると、ずいぶんその様相が異なっていることが看取され、雙方の韻圖に示された聲母・韻の違いは明らかである。とりわけ聲母に關して言えば、『度曲須知』經緯圖説の四聲經緯圖では三十六字母が示されるが、『問奇一覽』切韻捷法の四聲經緯圖では二十三字母しかない。そしてこの二十三字母には特異な現象が見られるのである。たとえば日母と禪母の合流、疑母字と羣母字の混合など、北方漢語の音韻變化には見られない特徴が發見される。これらの現象は、韻圖という限られた枠内に収めるための便宜的なものかもしれない。しかしまた一方で、當時の吳方言の特徴の一端とも考えうる。この圖が吳方言の音韻體系をあらわしているとすれば、漢語の近世音研究における貴重な資料であるのみならず、中國白話文學の讀解にも有用な情報を伝えてくれるにちがいないであろう。この問題についてはさらに精査する必要があり、今後の課題となるものである。